

# 『おねーさんの耳はロボの耳』 完結編第一話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

## 9. 回収指示

ここはHM研究所の中のとある一室。

会議用の大きな机があることから、恐らくは会議室なのだろう。研究所内の多くからすでに明かりが消えている時間にも関わらず、その大きな会議机を挟んで向かい合っている男たちがいた。

一人は長瀬源五郎。HM X12型マルチの開発責任者で、HM X13S型セリオの改造責任者でもある。実際には「改造責任者」などと言う呼称はないのだが、この際そう呼ばせてもらうことにする。

長瀬と向かい合っているのは、何を隠そうこのHM研究所の責任者、つまり所長その人であった。所長と言うだけあって、その恰幅は大した物である。なお、ここで注意していたきたいのは、あるのは恰幅であって貫禄ではないと言うこと。

「長瀬君、例の改造セリオなんだがね」

出っ張った腹をさすりながら所長が切り出す。そうして腹をさすっても、それが引っ込むわけではないことは本人以外は分かりきっている。

「所長、その『改造セリオ』と言う呼び方はやめていただけませんかねえ？」

苦笑しながら長瀬が答えると、所長はすぐに言い直した。

「S型セリオ…これならいいかね？」

それに長瀬は無言のまま、軽く首を下に動かすだけで答える。すると、所長はそのまま続けた。

「その、S型セリオなんだがね、この前の報告を読んだんだが…」

「何か問題でもありましたか？」

「いや、違うんだよ。その逆さ」

「逆ですか？」

「ああ。そもそも今回のプロジェクトにエライさんが関わってるのは君も聞いてるんだろう？ で、その方がねえ…偉く気に入ってしまったのだよ」

「気に入るって…あのセリオのことをですか？」

「うむ。それで、こっちにも色々と注文を出されてね…」

「やれやれ…、困ったものすなあ」

「まあ、そんなわけだね。この辺を一つ頼むよ…」

と、所長は長瀬に書類の入った封筒を手渡した。長瀬はそれをやや呆れた表情で受け取り、その場でさっと目を通す。

そして、一通り読んだ後、

「…来るんですか？ あの老人が…」

とぼつりともらした。

すると所長は焦った様子を見せながら、答える。

「な？ 何でご老人と？」

「こっちの情報収集能力を馬鹿にしちゃいけませんよ、所長。私や、セリオの改造をした時から、今回の一件に関わってるエライさんのことは分かっちゃいましたから」

「そうか。ま、HMX13に関する情報を探って行けば、引っ張り出せないことはないし、別段秘密しておく必要もないんだが…」

そう言いながら額に浮き出た汗を拭っている所長に、長瀬は続いて尋ねる。

「それにしても、どうして急に？」

すると、所長は困惑したような表情になった。要するに、所長自身も今回の通達には手を焼いていると言うことなのだ。

「孤独な老人だからな、あの人も…」

「つまりは話し相手になって欲しいと？ まあ、確かに今のセリオは話し相手としては申し分ないでしょうねえ」

少々皮肉混じりに長瀬が肯定したが、所長はその皮肉の部分にはあえて触れずに結論を告げる。どっちにしても、上からの通達には逆らいようがない。

「ま、そんなわけで、そう遠くないうちにS型セリオを引き取るように手配したいんだが…」

「すんなり引き取れるとお思いですか？」

「うん？ 何か問題があるのかね？」

「いえ、あの子がそれに従うかどうか、保証は出来ませんよ。それに、私のところの連中

が素直に従うかどうかも」

「脅してるともりかね？」

「いえ、そんなつもりはありませんよ。ただ、私には人望とか人をまとめる力なんてありませんから、何かあっても責任取れませんって言うだけです」

「それは十分な脅しだよ、長瀬君」

「そうですか？」

あからさまに通達に逆らう…と言うのではないのだが、長瀬の言い方には反骨の気概が見え隠れしていた。もともと自分の気に入らないことには、緩やかにかつ頑として反対の意思を表す長瀬だけに、所長の心労はつものるばかりなのだ。

「やれやれ…。どうしてこうも頭が痛くなるようなことばかり起きるんだろうねえ」

「ま、日頃の行いと言う奴です、ね、きつと」

その心労の多くを占める原因に、そんな風に飄々と言われてしまつては、何も言い返すことは出来ない。所長は大きいため息を吐いて、がっくりと肩を落としてしまった。

「…君はさぞかし長生きするだろうね」

だが、そんな言葉に対しても、長瀬は苦笑いをしながら、

「それも一概にいいとは言えませんけどね」

と、肩をすくめて答えただけだった。どのみち長瀬が所長を脅したところで事態が好転するはずもない。それは長瀬も所長も承知していた。

「…協力してくれた人物には、それなりの謝礼をしようことだし、うまくやってくれないかね？」

所長がそう告げると、長瀬は飄々としながらもどこか皮肉を込めて言う。

「それは命令ですかね？」

「…そう解釈した方が君にとって都合がいいなら、そうしてくれ。出来ることなら君の希望に添うようにしたいのはやまやまなんだが…」

所長の困惑した表情を見て、長瀬はようやく満足したのか、またはあくまでも本音を言わずにいる所長の態度に辟易したのか、

「そう言って頂けるだけで恐悦至極ですよ。それでは失礼します」

とだけ言って、そのまま会議室を出て行った。

長瀬は自分の机に戻るとすぐにタバコを口にくわえて、おもむろにそれに火を点けた。

「厳密に言えば、研究所内は原則的に全館禁煙で、喫煙は指定場所でのみしか許可されていない。」

長瀬もいつもなら喫煙場所まで行ってるのだが、機嫌の悪い時や夜遅くなどの人がいない時はこうして堂々とやっている。これはすでに周知の事実であるが、それを正面きって注意するのは山本くらいだった。

「あの老人のワガママにも困ったものだねえ…。さて…これをどうやって山本君に伝えたものか…」

どこか長瀬らしからぬため息めいたつぶやきは、一緒に吐き出されたタバコの煙の中に消えて行った。

さて、その頃のセリオオと言うと、これから風呂に入ろうとしている浩之に「ねえ浩之さん、たまにはお背中でも流してあげましょうか？」

といつもの調子で、浩之を圧倒しているのだった。

「い、いいよお…」

風呂場に向かう途中で動きを止めた浩之が答えると、マルチが屈託のない調子で続けて言う。

「セリオおねーさんは凄いですよ、浩之さん」

一体何がどう「凄い」のかを想像してしまうところだが、マルチの意図していることが、浩之の想像している「凄い」のとは違うだけは間違いないだろう。

「な、何が凄いなだよ、マルチ…」

唾をゴクリと飲み込んでマルチにそう聞き返すと、マルチの返事よりもセリオの方が早かった。

「だ・か・ら、試してみる？」

さらに唾をゴクリと飲み込む浩之に、すかさずセリオはウインクをしてみせる。

（そ、そー言えば、メイドロボってのは本来介護用なんだから、お風呂の世話もカンペキにこなせるって話だったよな…）

メイドロボの目的と仕様は確かに浩之の理解してる通りなのだが、この場合に限って言えば、浩之は明らかに別の目的を想定していた。

「…試すって？」

期待を感じながらも、わざと控え目にセリオに聞き返すと、セリオは笑顔で答えてくれる。

「そりゃあもう浩之さんの望むとおりよ」

「の、望むとーり？」

思わず声が上がっている上に、そのままオウム返しになっているが、そんなことに気が回っている様子ではないらしい。

「ええ。スツキリするわよ〜」

「……どうしようかな？」

セリオの言葉の後に浩之はそう漏らしたが、所詮は迷ってるふりをしてるに過ぎない。

ここで大事ななのは「自分から喜んでやってもらう」のではなく「セリオがぜひにと言うからやらせてみる」と言う状況に持って行くことである。

「セリオおねーさんのは気持ちいいですよ」

マルチも何気なくそれを助けてくれている。

「……でもなあ、セリオも大変だろうしなあ」

ちよつとだけ洩るような素振りを見せても、セリオなら自分の意図を読み取ってくれるだろう。浩之はそう思っていた。

「大変ってほどでもないわよ」

「………いつも俺は一人でゆつくりと入る主義だからなあ」

わざと煮え切らない言い方をするのも、セリオから「そんなこと言わずに、やらせてみてちょーだい」と言われるのを期待しているからだ。そして、それももうすぐだなど感じていた。

だが、不意にセリオが苦笑しながら、

「そーね、やっぱり一人でゆつくりと入りたいって言う浩之さんの意思を尊重すべきよ

ね」

と言った。

「え？」

セリオの返事に、一瞬自分の耳を疑ってしまふ浩之だった。まさかセリオがあっさりと言き下がるとは思っていなかったのだ。

「ちょっと残念だけど、一人で入りたいのを邪魔するわけには行かないから、もうこの話を言うのはやめておくわね、浩之さん」

「やめておくって？」

残念そうにするセリオの言葉は、浩之にさらなる追い討ちを掛ける。

「ご主人様の嗜好にそぐわないことはしないようにすることよ」

「…じゃ、今後一切？」

「そーね。せっかくだけど、わたしはマルチと一緒に入ることにするから。ね、マルチ、後で一緒に入りましょ」

「はい、セリオおねーさんと一緒に嬉しいですよ」

嬉しそうにはしゃぐマルチを横目に、セリオの「凄い」ところを見る機会を失ってしまった浩之は呆然としていた。

「…浩之さん？ お風呂に入るなら早めに行った方がいいんじゃない？」

と、呆然としてる浩之にセリオが声を掛けたが、浩之はそれに対して力なく

「ああ……」

と一言だけ答えて、風呂場に向かって行った。



今さら「それをやってくれ〜」とも言えず、かと言って「実は一人で入るのは好きじゃないんだ」とも言い出せずに、とっとと頼めばよかったと激しく後悔しての入浴だった。

それでもセリオの準備してくれたお風呂の温度は見事なまでに浩之の好みに合っていて、それが余計に身にしみて、

「こんなはずじゃなかったんだ〜。セリオおお……」

と、一人お風呂の中で悶々としていた浩之だった。

それはいつものことだった。決して平穩とは言えないが、楽しい日常の一コマに過ぎない。もちろん、セリオの回収指示が出されたことなど、浩之も当のセリオも露ほども知らなかった。

だが、事態はは着実に進んで行く。

長瀬が山本にセリオの回収指示を告げたのは、所長に言われてから二日後のことだった。

「と言うわけで、セリオを回収することになったらしいんだ」

だが、長瀬が思っていたよりも山本は冷静な反応を示した。

「…ちよつと早い気もしますが、上からの命令なら仕方ないですね」

「何で命令だと思うんだい？」

「主任の様子で分かりますよ、そんなこと」

「そうか、君には分かるか…」

「察するところ老人が出てきたんでしょう？ だったら、もう誰も逆らえせんよ」

長瀬の喋り方や身振りから、それが長瀬にとつて不本意であることを容易に感じ取った

山本は、不満げな表情を作りながらもそれに従うしかないと承知していた。

山本も長瀬同様に今回のセリオの一件に絡むトップが誰なのかを、早い時期に知っていたのである。

「君がそう言うとはちょっと意外だったが、まあ我々がどうにか出来るレベルじゃないことは確かかなんでね」

「所長もトップに振り回されるのが嫌いなくせに、根性がないですからね……」

思わず所長の批判をする山本だが、研究所の多くの者が同様の見方をしているし、それは確かに事実である。しかし、長瀬はそれに同調しなかった。

「マルチの一件ではあの人もそれなりに頑張ってくれたんだけどねえ。さすがに今回は相手が悪いと言うものだよ」

長瀬にたしなめられるような形となって、少しばつの悪さを感じた山本は、

「……そうでしたね、ちよつと言い過ぎました。……確かに今回は並みの重役相手と言うものでもありませんしね」

とすぐに訂正をした。

「で、どうするかね？」

長瀬が短く尋ねたのは、実際に回収するかどうかと言うことである。それに対する山本の態度は相変わらず冷静そのものだった。

「とりあえず期限を言われていないですから、催促がきたらその時に引き取りに行けばいいんじゃないですか？」

「やっぱりそうなるかい」

「当然でしょう。いくら相手があのご老人でも、そっちの都合に合わせて動くわけには行

きませんからね」

自信があるかどうかはともかく、山本がきっぱりと言うと、長瀬は肩をすくめながら、「やれやれ、君も結構悪いもの知らずなんだねえ」

と返した。それに対しても、山本は笑いながら答える。

「主任の教育の賜物ですよ」

「処置なしだね、そりゃ…」

長瀬も苦笑しながら、そんな山本に答えた。

この時、山本も長瀬もそれほど事態を深刻だとは思っていなかった。まだ回収せよとの明確な期日を言われていないし、正式な通達と言う形でもない。

一応セリオたちにはそれとなく匂わせておく程度にとどめておき、余計な心配や混乱を避ける方が賢明だと思っていたのだ。

だが、山本たちの目論見をあざ笑うかのごとく事態は思わぬところで動き出しているのだった。

それはとある建物の中。装飾品が豪奢であるので、かなりの資産家の屋敷であるのかも知れない。だが、そこには場違いな雰囲気な男が三人と、明らかにその三人とは何かが違う男が一人：都合四人の男がいた。

豪奢な部屋の中で、誰かに聞かれるのをはばかりるようにヒソヒソと三人が顔を寄せている。

「…もう一度確認するが、あのじじいが一人で外出する時を狙って、運転手を押さえるのはいいな？」

「うるさそうな執事は大丈夫か？」

「あいつは孫娘に掛かりつきりのはずだし、もう一人の孫娘はじじいとはそれほど仲がいいわけでもない」

「…もし、あの娘が一緒だったら、実行は見送りだな」

「まあ、それは仕方あるまい。女子供に手荒な真似はしたくないしな」

「うむ。俺らの目的はあくまでもあのじじいだけだからな」

広い部屋で顔を突き合わせるようにして内緒話をすると言うのは、それだけで怪しさを醸し出している。そんな姿を眺めながら、一人だけ離れている男がにやりとかすかな笑みを浮かべながら、三人に話し掛けた。

「この部屋で盗み聞きするような者はいないと言うのに、悪い事を相談するとなると人は自然に声が小さくなるものなのですね。それでどうするかは決まりましたか？」

男の口調は丁寧な物言いだったが、どこかに三人を見下したような雰囲気も感じられる。その突然の声に三人とも一瞬言葉を切ったが、一人がすぐに気を取り直して答える。

「…あのじじいをさらうのはいいんだが、本当にそれだけなのか？」

「それだけでは気がすみませんか？」

「うむう、あのじじいには色々やられてるからな」

「でも暴力はいけませんよ、暴力は。あの老人には何もやることがない生活と言うものが一番こたえるのですから、君たちは連れてくるだけでいいのです」

「へえ、そんなもんかね。ま、確かにあのやり手のじじいが腑抜けになる姿を見物するの  
も悪くはねえな」

「そうですよ。それにしばらくあの老人におとなしくしてもらっただけで、それをメリットとする方々も多いんですからねえ」

男はそう言って、またにやりと笑みを浮かべていた。その笑みに冷ややかなものを感じた三人はわずかに身体を震わせてしまうほどだった。その時、本当に寒かったのかどうかは…よく分からない。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第一話

初版:1997/10/07

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/08